

## ■パネルディスカッション

### ■パネリスト■

渡辺 豊博 氏 特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 事務局長  
伊藤 信吾 氏 認定特定非営利活動法人市民ファンドゆめの芽 事務局長  
千賀 裕太郎 氏 府中市市民協働推進協議会会長  
高野 律雄 府中市長

### ■コーディネーター■

澤 佳成 氏 東京農工大学大学院農学研究院・講師（環境哲学研究室）

澤) 本日の目的の一つに、先ほどご講演いただきましたが、具体的なまちづくりのお話を通して、協働のイメージを共有することです。そこで、この第2部のシンポジウムにおいて、高野市長や、最初に千賀座長のお考えをお聞きした上で、まず事前に募集した市民の皆様からのご質問に答えていただく。その次に先ほど



休み時間にいただいたご質問に、パネリストの方からお答えいただくという形で「協働とは何か?」「どうすれば市民主体のまちづくりが高まりあっていくのか」それを一緒に考えていくというのが本日のイベントの目的です。



市長) 皆様こんにちは、改めて本当に大勢の皆さんにご出席いただき、ありがとうございます。

協働の概要で、今日こうして多くの先生方にご出席いただき、これからパネルディスカッションを始めるが、市内の大学である農工大学の先生方にご協力いただいている。これも協働の一つの形だと思う。

これからのまちのありようを考えたとき、

少子高齢化は更に進んでいく。これまでは、道路を通せ、体育館を作れ、あっちに体育館を作ったらこっちにも欲しい、そして文化施設も欲しい、といったことでこれまで府中市や、恐らく多くのまちが、発展してきたのだと思っているが、これからは個々のニーズが違う中で高齢化が進む。こういった状況を考えると、市民の皆さんが智恵とそしてそれぞれの持つノウハウを活かしながら目標を一緒に定めて事業展開をしていく。このことが行政になくっては市民の皆さんの幸せな生活は保障されない。こういったことをまずは考えた。

そう思っている矢先に東日本大震災がおきた。自助・共助が今言われているが、公助であ

る行政の力がどこまでも及ぶものではない。行政の力がそういった自然災害が発生したときには届かないときに、人々、市民の皆さんの絆と、そしてコミュニティの力、更にはその力によって人と人が支えあっていくということで、高齢社会を過ごしていく。こう考えたときに、身近で目標を持って取り組む「市民協働」が色々な地域でできていかないか、ということ考えた。そして、先ほどお話した「市民協働推進本部」を設置し、千賀先生に今、会長をお願いしている「市民協働推進協議会」を設けた。

千賀) 協働の協議会を市長から仰せつかった時に、「いや、これは大変なことになったな」と思った。協働というのは「みんなでやる」ということだが、そういう形の「まちづくり」というのはすんなりいくとは必ずしも限らない。行政は行政でそれなりの見識と、お金も持っているし、権限も持っている。市民も、特に府中の場合は伝統的な、住んでこられた各家族の方々がいる。私は



ここに来て25年位だが、そんなものは鼻たれ小僧で、うちは10何代目だという方が沢山見える。そういう伝統的な方もいるし、新しく入ってきた方も沢山見える。東京都の中で西の方の大変微妙な位置にあって、しかも旧来の活動も活発だという、そんな場所でどういう状況が起こっているか、かなり考えていかないといけないと思った。その中でこの協働というもののキャッチフレーズをどうしたらいいものだろうと、一度、NPOの府中市民活動支援センターで考えたのだが、ある考えが出た。それは「小さな役割 私の居場所」というキャッチフレーズだ。「小さな役割」というのは誰でもこの「まちづくり」に、何らかの関わりを持てるようになるのが理想ではないかと。大きなことではなくて、小さなことでも良いので、自分も市民になり、この市の発展に寄与しているのだという気持ちが、参加意識、あるいは参加の喜びのようなものが感じられる、何かそういう協働のあり方を広げたい。それは主に新しい市民の皆さんの気持ちかもしれないが、そういう部分も含めて是非「市民協働」というのを少し広く考えて欲しいと思ってこの協働の委員会を運営して来たつもりだ。

パブリックコメントで、基本方針について何点か意見を頂いているが、今日のシンポジウムに参加して、話を聞いて、「私はこう思ってる」「こうしたい」という感想でもいいので、是非お寄せいただきたいと思っている。

#### 事前質問①協働を進めていく上での、メリットデメリットは？市民サービスの低下にならないか？

渡辺) 協働ということで今日のこの会があるわけだが、一緒に考えることなので、あんまり「協働、協働」と考える必要もないかなと思う。「協働」の目的としては、今以上に「安心安全」な、「死に甲斐のあるまち」だ、生き甲斐でなく。「この町で死んでいってよかった」と最後に手を握ってゆっくり死になさいと言ってくれる人が横にいてくれたという、1人で生きているんじゃない、沢山の人が自分を見守ってくれる、支えてくれるというまちを作っていくような、1つの「まちづくり」の手法として「協働」というシステムじゃないかと思う。

メリット・デメリットということだが、これは一緒にやっていくのなら分からない同士



が知り合うという行為だと思う。夫婦が二人一緒になって、長くやっていく。生活してくわけだが、一緒になれば我慢しなくてはならないことも出てくるし、相手とお付き合いしたことにより、子どもを育てるといふ共有の目的活動を持つことにより、お互いの役割を認識しあう、あるいはお互いの個性を知り合う、そこで新しい発見があって、更にその方をまた違う形で深く愛す。だから、愛情が続く

くというか、継続してくというものでもあると思う。

特に行政側は、活動の原資は税金で、パートナーと呼んでいるが、納税者は神様だ。その皆様のお金で職員は飯を食わせていただいているので、やはり神様である方のご意見を聞くなんてことは至極当然で、目線が生活者に向いている、あるいは社会的弱者に行政の目が向いているというのは当たり前だと思う。静岡県庁に35年いたが、下を見ていない。これは本末転倒であって、我々は常に足元を見ます。役人は意識がなければいけない。そういう意味では足元と言えないが、一般市民が何を考え、何を苦しみ、何を求めようとしているかを、その現場に近づいて、同じ目線で、時間帯で、意思を感じるというか、共有することは、当たり前のことなのではないか。あまりにも偉そうにしすぎた。その部分が無駄を生んでしまった。かつ、また市民もそれを許した。市民は行政に依存し、甘えた。政治家のそういう油断が、今の国庫負担の無駄を作ってしまった。お互い歩み寄って、民主主義の原点に戻れば、「協働」という仕組みは、同じじゃないか。さっきの夫婦で子どもを作るように、何か共有の活動というか、具体的な活動と実践活動を見つけながら、お互い役所のいいところ、悪いところ、それから役所というものは力があるので、そういうものを社会的に還元していく、引き出していく。そういう作業をお互いにやっていく作業ではないかなと考えている。だからまず、活動の蓄積が大事なのではないか。それから、市長さんがリーダーなので、ボランティアの世界に出ていく、あるいはそういう目線をもっている役人さんを是非守っていただきたいと思う。役人を守れるのは市長だけです。役人を守って、地域に降りる、それを仕事として認める、お前の成果として認めると、一言部長会議で言えばみんな地域に降りてきて協働が達成する。

伊藤) 先ほど申し上げましたが、私たちは、3年間は全く行政とは無関係で、そのあと6年間行政とのマッチングということでやっている。その中で改めて行政と協働とするメリット・デメリットとは何かと考えたことはないが、自分たちでやっていたときは、やっぱり自由だった。監査基準とか審査員とかいたが、そういうこと関係なくあそこの団体は遅刻が多いとか、報告書が来なかったとか、自分たちの考えでやっていたところがあった。しかし、



行政と一緒にやると、自分たちの考えで何もできずに、固い感じにはなる。その代わりに、我々も背筋を伸ばした感じでやらないといけなくなった。自分たちでやっていた時は、やめたといってもいいわけだが、自分たちでお金も出していたので、そういった意味では本当に継続性があったのか、今は疑問に思う。ただ、メリット・デメリットをいうと、それぞれ行政・市民の意図、例えば市民であればネットワークがまちなかに広がっていくだとか、独自の視点があるとか、意思決定が早いだとか、行政と全然違うところだと思う。逆に行政は資金がありますし、ある意味統率力もあって、そういう良いところ、悪いところをお互いに持っているのだが、良いところ同士が協働で出るか、悪いところ同士が協働で出ているかは、やり方だと思う、協働は手法なので。協働のメリット・デメリットというのは抽象的な概念でなく、今、やっている事例ではいいところが出たね、悪いところが出たね、ということの繰り返しではないかと思う。例えば、もし悪いところが出るとすれば、基本的に行政からお金が半分出るわけだから、寄付金が集まらなくても半分出るのだからこの辺で良いか、という気持ちになるような年もあった。この辺でいいやというような、行政に甘えるような、行政がついているからと思うようなところは、本当はあまり良いことじゃないと思う。もう1つ言えば、我々が違った形の助成をしたいと、何年か前に環境に特化したもので一つ助成制度を作るとか、学生向けの一つ助成制度を作るという提案をした時、行政に通すのがめんどくさいからとやめてしまったことがある。そのときはデメリットが完全に出たと思う。我々として新しいことがすぐにでも、意思決定が早いので出来るはずだが、行政に持ちかけてうまくいかないこともある。、そういった悪いところが出てくる年もあって、そういう場面は職員もいるということで、我々としてはそういうことは頭において、我々の協働が上手く行くという事をいつも考えてやっていくことが必要だと思う。

事前質問②年齢別に協働に参加する形は、どういったケースがあるか？個人の持つ力で有益なものが、市では、一個人市民参加を認めているか？

渡辺) 私どもの組織はバームクーヘンのような同心円状になっていて、事務局が職員8名、予算が6000万位で多くて1億円位で、そのまわりに戦略を考えるコアスタッフが13名いる。そして20の市民団体とネットワークを組んでいるので、外部スタッフ130名と、そのまわりにインストラクターという現場で色々やっていただく方が150名位、そのまわりにボランティアスタッフが約300名いる。こういった形で丸く同心円状に広がっているわけだ。その構成だが、ほとんど高齢者。60歳以上の、第二の人生をとという方が中心。若い人はほとんどいない。今大学で教えているので、学生がフィールド体験ということで年間にだいたい100~150名来ているが、実際に現場も含め、組織的な意味も、戦略的に考えるも、50~80歳の皆さんががんばっているというのが現実のところだ。グラウンドワークというのは、市民団体の調整仲介役。市民・行政・企業の真ん中において、調整・仲介するということから、そこに集まってくる方の特性というのは、生意気だが全部分かる。60の仕事をしているということは、60のメニューがあるということだ。手先が器用な方、農業が好きな方、あるいは子育て関係、あるいは福祉関係、あるいは生き物・生物的なことが好きな方。そういったいろんな嗜好にあわせてメニューを提示できる。それをつなげている。そういう団体だ。そういうフィールドを提供することで、年を取っているとか年齢別とかは考えたことがない。私は64歳になりますけれど、私よりはるかに元気な83歳がいる。ですから歳を感じたことはほとんどない。

要は、いかにそのお父さん、お母さんの中に、専門性を持っていて何をやりたいのかということ色々な場で情報を収集して、この時にはあの人に来てもらわないと困るということをお声掛けをして、どういうことをすれば頑張っただけかを知ることだ。社会参加というか、もう1人の自分の表現の場を、与えているつもりでいる。ボランティアの方かと思っていないです。そこで稼いでください、そして年金をもらわないで下さい。というようなことまでやっていますが、その場を作るという力を持っているどこかがいないと、安心して、持続的に、自分の得意技を社会で発揮するのはなかなか難しいと私は考えている。だから我々も切磋琢磨して、安心安全なもう1つの活躍の場をご提供しないといけない。いきいきとした活動の場というのは、協働の場としてはものすごく楽しいところだ。そこに行政の人がいれば直接その方に文句言えるわけだから。市役所に文句を言うのは大変ですよ。それがわざわざ出張して文句を聞きに来てくれる。文句も三ヶ月も言えば言うことなくなるから、あとは前向きの議論しかなくなる。皆さんも文句ばかり言わないで、活動しながら、実績をつくりながら文句を言えば、言葉に重みが出て、説得力が出てくるから、行政もいうこと聞かなくちゃダメだ、こういうお互いの民主主義の学校が協働のプロセスなんじゃないかと思っっている。年齢は関係ないし、お年寄り、女性の、もったいないパワーを、社会に引き出して、更に若い人に稼いでもらって子どもを作ってもらって、ボランティアなんかやらなくていいという社会を作らないといけない。高齢者は頑張っって年金を返上する。病院にもいかない、ガンガン稼ぐ。こういう社会を作る可能性は高いです。皆さんだったら大丈夫。

伊藤) 私は50代で、私たちの団体は2、30代後半～40代の同年代でやっている。ファンドは中間支援組織なので、イベントなどがあまりあるわけではない。また、それ以上メンバーを増やすことを、私も周りの人も考えていないので、お年を召した方も学生もいない。相模原で年代別のアンケートをしていて、不思議なことに「協働」がいいとか「協働」はこれからの時代だという回答が20代と60代、70代ぐらいの方の割合が高くて、40代ぐらいはそういうことはあまり意識としては低いという結果が出ている。自分を振り返ってみると、正直仕事とか、そういうことが40～50代にピークとなって、私も本当に忙しい。私は「協働」ということでやっておりますが「協働ってなに？」となりかねないと思っっている。

どういった事業を助成しているかということ、主婦の方で子育て支援をする方、いろんな切り口があるが、絵を見せて楽しむ情操教育をするとか、そういった色々な分野の子育て支援の分野の主婦の方が多いかなと思っっている。それから、リタイアした方で、おもちゃドクターという、こわれたおもちゃを持ってきたら、子どもと一緒に直すといった事業に助成している。今まで自分がやってきたことのノウハウを生かすということをやっている方が多いかと思っます。「理科と遊ぼう会」というのをやっているメンバーの方がいるが、学校の理科の先生だった。さらに、地域にもっと理科のことを知りたいという方が出て、やっているようだ。あとは、精神障害者の登用をしている会社ですずっと働いていた方が、精神障害者を会社に雇用するという具体的な利害が分かっているということで、色々な会社に精神障害者を繋ぐということをしている協働事業に助成しているようだ。そういったことで、リタイアした方はノウハウを還元することが多いのかなと思っっている。企業系の方というのは何をしているのかということ、「ゆめの芽」のメンバーは企業ですが、あとは側面から支援するということが多いようだが、企業だけでNPO等を支援するところはない。学生というのは、元気があって興味があるので、イベントや調査などを行うとき、学生さんがいると動きが良いようです。例えば、藤野町というところの歴史的な建造物を巡って調査して撮影してというこ

とを、学生さんたちが沢山手伝っているという事業がある。また、桜美林大の研究室で「若者のメンタルヘルス事業」というのを協働事業としてやっているようだが、若者がボランティアで沢山手伝っていただいていると言っている。学生のうちから起業する方も多くなっているようで、我々の助成事業では学生自体が中心になっているのではないのですが、学生向けのメニューを作って、色々な年代が協働するような仕掛けができたらと思っている。

事前質問②関連：協働への参加形態についてですが、一個人での市民参加というのを府中市の今後の協働は認めているだろうか。

千賀) 基本方針の5Pの4の府中市らしい協働の(1)のア、市民だ。協働によるまちづくりは、1人からでも参加できる。多分この部分の文言に対する質問だと思う。1人で参加できるか、認めているのか。認めるも認めないも、1人で参加してほしい。別にスクラム組んで10人以上でないと入れないわけでもない。しかも参加というのは、組織を作ってやり始めるということが参加ではない。すでにある様々な団体にちょっと顔を出してみる、そこから始まると思う。個人の個は、孤立の孤であってはいけないと思う。「1人」と「1人」が繋がってまさに「人」という字はそういうものなのですけど、「都市」というのは往々にして人は多いですけど繋がってないことが多くある。色々な形で趣味であったり、あるいはさっきの伊藤さんの言う得意技であったり、そういう自分の得意技をやっているところに顔を出して参加してみる。これも重要な参加だと思うので、気楽に、そこから始められたらいいかなと思う。それが最終的には少しずつ都市全体の協働が進んでいくことになるかと思う。

事前質問③『地域包括ケアシステム』の構築など、福祉的な要素についても、平成26年度から、新しい総合計画に基づき、府中市の政策も始まるが、市として「市民協働」のなじむと思う分野、特に進めていきたい分野というものはあるか？協働の特性として、分野にまたがっての活動を行いやすいところがあるが、その辺は、協議会の中でも議論はあったのか？

市長) 平成25年度の間、第5次府中市総合計画ということで12年間の計画期間が終わろうとしていて、4月からの新年度は8年間の期間による第6次総合計画に移行することになっている。この中では、「目指す都市像」を「みんなで作る 笑顔あふれる住みよいまち」と掲げている。もちろん、今後高齢化が進んで行くという中では、今『地域包括ケアシステム』のことについて、具体的なお質問があったかと思うが、しかし、どの分野において、市民協働を期待するかというと、それは個別にはではないかなと。やはり、市民の皆さんが自発的に「こういうことやってみよう」といったこと、今、千賀先生から1人からというお話がされたが、1人からあるいは仲の良い方同士が集まって、例えば、近所のご高齢の方たちにお集まりいただいて、歌を歌ったり、楽しいことを少しでもいいから時間を共有しようというような話になったときに、そういうことを立ち上げていただく。もし、ある決まった特定日時に1人の方がいらっしゃらなかったときに、どうしたのかなと見て見守りをする。こういった自然な流れで、まちのことが進んでいくことが、市民協働でいいのではないかなと思っている。一方で、取り組みやすい分野とすれば、やはり、環境、子育て、それから福祉、公共施設あるいは道路などの身近なインフラ、その維持管理。市民それぞれ1人ではなかなかいかないかもしれないが、市内の地元の皆さんと協働していく、そういった新しい形も模索していけるのではないかなと思ってそれを指示しているところだ。

千賀) 分野をまたがった「協働」の取り組みは「協議会」でもかなり議論が出た。当初は市民の活動と行政の活動が中心になるような議論だったが、もっと市民団体間の協働も取り上げたら良いのではないかと。例えば府中の場合、水田もまだある。農業は産業ですが、例えば、障害者、あるいは子どもが農業体験をする。これは教育や福祉と産業分野との協働になるわけだ。それはお互い非常に大きな効果があるわけだ。そういう意味での分野間の協働とは非常に大事だと思っていて、そんなこともこの方針の中には書かれている。

渡辺) 協働の最大のメリットは、行政は縦割りですが、NPOとの協働のメリットというのは横割りになる。これ、国際交流の団体もいれば農業者もいれば、商工もいれば、女性の団体もいるので、まち全体にいる人たちが同じ目線で1つの目標に向かって、同じ問題意識でいっぺんに議論できるということだ。ですから会議に15人来て、役所の人を呼ぶともう30人くらいになる。自分の会議のこと自体でいうと、これと行政、NPOが連携すればすごく効率的なことになる。具体的に言うと三島の夏祭りを、商工会議所と、商工関係の市の担当だけがやっていたが、グラウンドワークが入ってから、例えば福祉関係の方とか、農業関係の方とかいう、そういう形でまちをきれいにする人たちのボランティア団体とかいっぺんに入って、協議会を運営する形に変わった。なので、三島の8月15日のお祭りは30万人とか50万人とか来ますが、次の朝4時に、ゴミを拾う方150人出てきて拾うんです。ですから、お祭りの次の朝、ゴミが全くない。今まではお祭りの後ゴミだらけだったというようなことです。例えばお店で、福祉の方もお店を出せるようにテキヤさんと話して、を排除するのではなく、連携しながら素人の人も祭りの中にお店を出せるような仕組みを作ったのは行政ではない。我々が入って、話をして、福祉の夏祭り、行政の夏祭り、女性の夏祭りではなく、市民全体の三島の夏祭りになった。そういう例もある。

伊藤) NPOと行政の協働だが、相模原で「パートナーシップ推進指針」というのができたのが2001年位で、「協働事業提案制度」というのも5年ぐらい前からできて、NPOが行政と協働する、ということ自体、あまり珍しいことではないですし、いろいろな場面で行われているようです。企業とNPO、企業と行政、企業とNPOと行政とか、「グラウンドワーク三島」のようなダイナミックな動きはほとんどないように思う。特に、企業とNPOというのを「ゆめの芽」はやっているが、一般の企業で、NPOと連携するというのはどうなのというのがあるし、NPOからすると、企業はお金儲けをしているということで、その連携は進まないところがある。府中市の場合は市長さんが協働推進を、前面に打ち出しているところが非常にうらやましく思う。行政が何かの流れで、企業やNPOが一緒の場面や一緒のテーブルが作れば、企業側も入りやすいしNPOの側も入りやすいので、これから「ゆめの芽」が行政に働きかけるなどして、そういうテーブルを作っていこうかと考えている。

事前質問④グラウンドワークにおいて市行政はどんな役割を果たしているのか、あるいは果たすべきか？例えば構成団体の一つとしてなのか、それとも、側面的な支援なのか？

市は協働を進めるに当たって、市はどういった関係性を持って、役割を果たしていくべきか？

渡辺) 構成団体の一つでもあるし、側面的・間接的な支援もする団体。行政とのパートナーシッ

プ、行政との存在は必要不可欠だ。なぜかという、今、企業の話も出たが、企業へのアプローチをするときに、社会的信用力という面において「市長は承知していますか」「行政の企画部長さんは承知していますか」三島の建設業協会の会長は僕に聞く。そういうところで仕事している人は、必ず行政の介入は確認してくる。そうしないとNPOに対する社会的信用は、はっきりいうがありえない。そういう点では我々の活動を直に話し、行政の考え方も聞きながら、親しくはなる必要はない。微妙な緊張感。この対等性を持ちながら、二十数年間戦ってきている。もう市長も四代目となっている。20数年間200万円ほど補助金を頂いているが、色々な補助事業や国の交付金などをいただくときに、実は担保人として市長さんの印をもらう。裏判がついてないとお金がもらえないという事実もある。府中市がNPOに対して市長さんの印を押すのです。押せるだろうか？三島の市長さんは「ポン」と押してくれるので、前の日に持って行っても「早く持ってきてよ」とは言うが、市長と相談して印を押す。そうしないと大きなお金はもらえない。そのかわりうちがちゃんとやらないと、市は後で責任を取るんですよ。信用性をお互い同士で持ち合っていけば、行政も我々を上手に使ってくるし、我々も上手くやろうと。でも最終的なメリットは市民だ。それは共有の場だ。三島を愛し、その仲間同士なので、当然一緒になって得意技や知恵を出しながら市民の福利厚生が高まることは、当たり前なことだと思う。

市長) 市が関わらないということはないと思う。直接的あるいは間接的に関わるべきだと思う。市民の皆さんの目的と、行政の目的がある程度一致した状態で、そこにその手法を考えて進めていく、あるいはその支援をするに当たって、その支援の仕方というのを、それぞれによって関係や経緯は違うかもしれないが、直接的あるいは間接的な関わりを持って協働を進めていくのだろうと思う。ただ、あまり縛りが強すぎると市民の皆さんがそのへんは嫌う可能性があるということは、先ほどのお話でも言われたとおりが、放ったらかしという風に行くつもりはない。市の職員に、この2年間何度か言ったことがある。それは、「新しい市民の皆さんのニーズを把握できているか」ということ。それから「変化を恐れずに事業を展開していこう」。まさしく市が市民の皆さんの協力を期待し、信頼する絆を強くしていきたいという気持ちの表れと取っていただけるとありがたい。

当日質問：協働する方を引き込むコツは何か？ 長く成果を上げ続けるコツは何か？

渡辺) 飲み屋だ。いっしょに飲むことで、「右手にスコップ、左手に缶ビール」ということだ。飲んで夢も語り、そして語ったものを技術として、小さな成果を積み重ねて、達成感を共有して、より質の高いものにしながら、更にお互い同士の学ぶ感覚を高めていく。これが持続の担保だと思う。新しいことに挑戦することによって、我々がやったという更なる満足感。これがまち作りの主役に躍り出てくることだと思うので、身勝手にそう思えば良い。みんながみんな、あれは俺がやったと言う。それでいいのでは。行政もがんばった、皆さんもがんばった、AさんもBさんもがんばった。これが長続きの最大のコツじゃないかなと思う。

伊藤) 寄付を薄く広く集めることで継続していく仕組みをやっていこうと思っているが、やはりNPOと企業とを触れ合う一つのフォーラム組織みたいなものを、渡辺さんがおっしゃるように、飲みながら楽しい場を次々と作っていくことかなと思っている。

澤) それでは、最後に、一言ずつお願いしたい。

市長) 市民協働の推進について、こういったシンポジウムが開催できたこと、それについては会場にお集まりの皆様とコーディネーター、パネリストの皆様方に心から感謝をしたい。大変具体的な事例もお聞きをし、参考になる点があった。私は先ほど申し上げたように市長選挙にあたって、市民協働推進を進めていくということを市民の皆さんに語りかけた。そのとき、もっと協力しやすい市役所にしてという厳しいご指摘を受けた。そこが原点という思いを、今日また新たにさせていただいた。是非これから市の職員も研修を重ねて、市民の皆さんのご意見を広く受け入れ、そして協働できるように推進体制作りを努めていきたいと考えている。

千賀) 今日話を聞いて、市民協働は市民だけでなく、企業、団体含めて、なるべくハードルは低くしたほうがいい。例えば何か講座に参加する。これも重要な協働のあり方だと思う。その中で仲間が1人でも2人でも増えてくる。いろんなことが議論できるようになる。都市は基本的にさみしい街だ。たくさん人はいるけれど、本当に議論できる仲間が少ないというのが都市の特徴なので、そういうものを含めて、参加のハードルを低くして、市民協働をしやすいうようにしていきたいと思う。そういう意味では、パブコメの最中ですので、是非、私も協議会が作った案に対し、意見をお出しいただきたいと思う。今日の会を参考にしながら、また皆様方のパブコメを参考にしながら、最終的に良いものを作っていきたいと思う。

渡辺) 五月には蛍が乱舞していますので、高野市長も皆さんも、ぜひ三島に来ていただき、我々の活動の成果を是非見て欲しい。あの蛍の光を見ていると、我々の元気の素だし、給与でもあると思う。実は沼津市の職員が一週間、グラウンドワーク三島で研修している。台湾のキャリアが一ヶ月間協働の勉強に来る予定だ。そういう意味では、是非、職員さん、や市民の皆さんに、三島に一ヶ月間来てNPOの現場を見ていただきたい。百聞は一見にしかずということもあるので、ぜひ現場にきて確認していただければと思う。お待ちしております。

伊藤) 会場に来て驚いたことが2つあった。1つは市長自らが市民協働を推進するということ、公約にして当選したということ。更に、相模原は人口80万人ぐらいだが、同じシンポジウムをやってもこれだけの方が集まらないと思う。ですから、みなさん本当に協働とかそういうことに対する意識が高いのだと思う。本当に感動している。相模原はファンドもあるし、「協働事業提案制度」もあるし、サポートセンターもあるのだが、神奈川は県自体が色々やっているから進んでいる市も多い。他もやっているからちょっとやっていかないと追いつかないといった程度で行政は始めているところに付き合ったというのが、最初のスタートだったような気がする。だから皆さんのように熱気を持って方針を作ることが出来るのは、本当にうらやましいと思う。

指針の中にファンドというのが出ている。是非、皆さんの中でファンドを作っていけたらいいと思う。市が作りなさいとって市民ファンドを作るのは、どうも筋が違う。市が最初に何千万とかを出していることが多いようだが、私はそれで運営しなさいというのは本当の市民ファンドではないという気がする。市長、是非、市民の方から作るという働きかけがあって、ファンドを研究することがあれば、一緒に語ることは出来ると思うので、お手伝いできたらと思う。

## ■プログラム(4)閉会

澤) 本日お話を伺って思ったのが「まちを知る」ということが大事と思った。その上で共有の宝物を作っていく、府中の誇れるもの、府中にしかないものを探して、それを大事にしていく。その上で市民の一人ひとりの能力を活かして、一人ひとりが主役になって場を作ったり、あるいはそれが難しいという方は、すでにある場に飛び込んだりすればよいという形になったりだが、場に参加する、そういったことでいろいろな場ができていくことで、それが繋がっていった協働のネットワークが出来るということ、高野市長のお話を聞いて思った。その結果、まちに自信が、私がこれをしたという自信がみなぎってくれば、まちへの愛着が生まれるし、それを次世代に残していこうという活動が生まれる。その結果、良好な社会環境を、世代を超えて残せる。それが協働なのだということを私なりに感じた。



## ■情報コーナー (～午後7時)

市内の活動団体、活動情報の紹介

- 府中市市民協働推進協議会
- 第6次府中市総合計画
- パブリックコメント
- NPO法人府中かんきょう市民の会
- 府中市生涯学習ボランティア「悠学の会」
- まちネット府中
- 府中まちコム舎
- 地域包括支援センター「これまさ」
- 独立大学法人東京農工大学
- 独立大学法人東京外国語大学
- 府中市自治会連合会
- 府中NPO・ボランティア活動センター

